2015/10/6

新約聖書とその思想
―パウロ研究（３）―

S. Ashina

オリエンテーション

＜本演習の意図と目的＞

新約聖書は、キリスト教思想の基盤であり、キリスト教思想研究を志す者には、聖書原典を読む能 力（語学・聖書学・聖書神学など）が求められる。本演習ではギリシャ語原典の講読を通して現代 聖書学の基礎の習得を目指す。

本年度は、昨年度に続き、多岐にわたる新約聖書の思想の内から、パウロのローマの信徒への手紙の第３章を講読し、パウロのテキストに即しつつその思想の内実へと迫ることを試みたい。本演習では、各種の辞書の使用法から、聖書注解書の扱い方といった、聖書テキストを読解する上で必要となる基礎的作業の習熟を目指す。受講者には、パウロの思想の理解を深めるために、Cranfield の注解書（ICC）などの注解書の参照が求められる。また、Daniel Patte and Cristina Grenholm 編の Modern Interpretations of Romans,Bloomsbury, 2013 の第三章(Carsten Claussen,"Albert Schweitzer's Understanding of Righteousness by Faith according to Paul's Letter to the Romans)の講読を並行して行う予定である。

＜テキスト・文献＞

１．Nestle-Aland, *Novum Testamentum Graece*, Deutsche Bibelgessellschaft, 28.Aufl, 2012.
２．Gerhard Kittel und Gerhard Frierich, *Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament*, Kohlhammer, 1933-1973.
３．C.E.B. Cranfield, *The Epistle to the Romans*（ICC）, T & T Clark, 1975.
４．Cristina Grenholm, *Romans Interpreted. A Comparative Analysis of the Commentaries of Barth, Nygren, Cranfield and Wilckens on Paul 's Epistle to the Romans*, Almqvist & Wirsell International, 1990.
５．Ｇ・ボルンカム『パウロ　その生涯と使信』新教出版社（原著1969年）。
６．Ｅ・ケーゼマン『パウロ神学の核心』ヨルダン社（原著1969年）。
７．Ｅ・Ｐ・サンダース『パウロ』教文館（原著1991年）。
８．荒井献編『パウロをどうとらえるか』新教出版社、1972年。
９．佐竹明『使徒パウロ　伝道にかけた生涯　新版』新教出版社、2008年。
10．青野太潮『最初期キリスト教思想の軌跡　イエス・パウロ・その後』新教出版社、2013年。
11．Jürgen Roloff, *Neues Testament*, Neukirchener,1999.
12．Craig L. Blomberg, *A Handbook of New Testament Exegesis*, Baker Academic, 2010.
13．Teodore W. Jennings, Jr., *Outlaw Justice. The Messianic Politics of Paul*, Stanford University Press, 2013.
14．Daniel Patte and Cristina Grenholm(eds.), *Modern Interpretations of Romans*, T & T Clark, 2013.
15. Chrys C. Caragounis, *The Development of Greek and the New Testament. Morphology, Syntax, Phonology, and Textual Transmission*, Baker Academic, 2006.

＜演習予定＞

10/6, 13, 20, 27, 11/10, 17, 27, 12/1, 8, 22, 1/5, 11, 18

１．オリエンテーション・打ち合わせ：10/6
２．基本箇所の読解＋注解書

Rom.3.1-
３．研究文献　→　分担し発表する。

＜聖書研究と註記書＞
１．Tremper Longman III,
Old Testament Commentary Survey, Fifth Edition,
Baker Academic, 2013（1991）.

２．D.A.Carson,
New Testament Commentary Survey. Seventh Edition,
Baker Academic, 2013（1986）.

Preface
Abbreviations

1. Introductory Notes
   1.1 The Need for Several Types of Commentary
   1.2 Individual Commentaries or Series
      1.2.1 General Principles
      1.2.2 Series Worth Noting but Not Pursuing
      1.2.3 More Substantial Series
      1.2.4 One-Volume Multiauthor Commentaries
   1.3 Older Commentaries
   1.4 One-Author Stes

2. Supplements to Commentaries
   2.1 New Testament Introductions
   2.2 New Testament Theologies

3. Individual Commentaries
   3.1 Gospels 3.2 Matthew ～ 3.21 Revelation

4. Some "Best Buys"

Name Index

For an effective teaching and preaching ministry, commentaries take their place among other essential tools. But since different tasks often require different tools, useful commentaries are of more than one kind. Those listed in this book may serve in at least three or four distinct ways, which correspond to the following needs.（1）
The dominant need is to understand meanings accurately.（1）
To understand a passage（let alone to expound it forcefully）often requires a faithful and imaginative historical reconstruction of events.
some commentaries often useful guidance on the legitimate range of practical application.（2）

先に紹介した旧約聖書註解書の概観が、主要な注解書の整理されたリストという性格が強いのに対して、今回の新約聖書注解書の概観では、各注解書の相互のつながりや対比に

関わる叙述が明確になされており、読んで受ける印象はかなり違っている。また、第４章の Some "Best Boys"は一定の参考にはなるだろう。ローマ書については、次のようになっている。

Douglas J. Moo in NIC; Thomas R. Schreiner; C.E.B. Cranfield for advancedstudents

パウロと古代地中海世界のキリスト教

（1）パウロ――迫害者から使徒へ

１．パウロの思想的背景：ヘレニズム・ユダヤ教と都市

様々な思想的な文脈が交差している。ギリシア語訳聖書の存在。

30 頃:エルサレム教会の成立　66:ローマの大火事、皇帝ネロのキリスト教迫害

66-70:第一次ユダヤ戦争（132-135:第二次）

２．迫害者から異邦人への使徒への回心（復活のキリストとの出会い）

↓

地中海世界の伝道旅行、都市から都市へ伝道するキリスト教徒と存在

急速な拡大（点から点へ）

３．エルサレム教会とユダヤ的なキリスト教（あるいはユダヤ教イエス派）

律法遵守は救済の条件か、救われるためにはユダヤ人になる必要があるか

（2）パウロのキリスト教思想の特徴

４．核心点

・キリストの十字架と復活における神の救済の活動

・神の救済活動の一環としての異邦人伝道　→　自らの異邦人伝道の意義

５．諸論争の文脈に即した議論の展開

いくつかの基本的な原則の存在、しかし首尾一貫した体系化はなされていない。

いっさいは神の摂理によるが、人間には責任がある。

６．新しい歴史理解＝救済史（旧約と新約の統合）

異邦人の救い　→　ユダヤ人の救い　→　被造物全体の救い

７．救済とは何か

・イエスの十字架（死）と復活への参与　→　キリスト共に死にそして生きる

神秘主義的あるいは密儀宗教的。法律的意味はむしろ二次的

・罪の力からの解放：古い存在から新しい存在への変容・移行

移行は信仰においてすでに始まりつつあるが、終末（再臨）における完成する。

８．救済に参与した人間は何をするか。

・自然な帰結としての倫理的な生活

律法的生は前提ではなく、結果。模範的な市民であり得る。

・キリストの体の一体性（教会）への参与

９．いわゆる信仰義認論：「義の認められる」に止まらず、「義となる」。　　cf. ルター

（3）パウロの意義と新しいパウロ論

10. 普遍宗教・世界宗教キリスト教への道

民族性を越えて世界へ、市民社会のキリスト教への道？

11. 新しいパウロ解釈：体制派パウロから戦うパウロへ、政治哲学におけるパウロ論

「パウロの神学の社会革命をひき起こす潜在力を秘めていた」「ユダヤ人と異邦人の一体化」（サンダース、24）

「そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。」（ガラテ

ヤ 3:28）

＜聖書テキスト＞
「異邦人のためにキリスト・イエスに仕える者となり、神の福音のために祭司の役を務めているからです。」（ローマ 15:16）
「16　わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。17　福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。18　不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は天から怒りを現されます。19　なぜなら、神について知りうる事柄は、彼らにも明らかだからです。神がそれを示されたのです。」（ローマ１）
「6 わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。7 死んだ者は、罪から解放されています。8 わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。9 そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。10　キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。11 このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。」（ローマ 6）
「だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。」（２コリント 4:16）
「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」（２コリ 5:17）

＜参考文献＞
１．Ｈ．Ｃ．キー『初期キリスト教の社会学』ヨルダン社。
２．佐竹明『使徒パウロ―伝道にかけた生涯（新版）』NHKブックス。
３．Ｇ．ボルンカム『パウロ――その生涯と使信』新教出版社。
４．Ｅ．ケーゼマン『パウロ神学の核心』ヨルダン社。
５．Ｅ．Ｐ．サンダース『パウロ』教文館。
６．バートン・マック『誰が新約聖書を書いたのか』青土社。